

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00107

研究課題名（和文）蓋然説と宣教：在スペイン史料調査を踏まえたカトリック日本宣教の思想的意義

研究課題名（英文）Probabilism and the Mission: The Global Significance of the Catholic Mission in Early-Modern Japan Based on Historiographical Research in Spain

研究代表者

折井 善果 (ORID, Yoshimi)

慶應義塾大学・法学部（日吉）・教授

研究者番号：80453869

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：16世紀後半以降カトリック神学において確立していった「蓋然説」は、日本の宣教活動において、宣教師が、過去の事例では判断できないような行為の善悪の判断に迫られた際の、有力な神学的道標として機能しており、かつ、彼らの内的道徳的ジレンマに対する心理的な安寧としても機能していることが明らかになった。

また、期せずしてパリで存在が確認された日本イエズス会版『サントスの御作業』（1591）の分析の結果、同書に見られた書き込みが、レバント地方を含む東洋諸語との比較という視点を伴ってヨーロッパで日本語が研究された、非常に初期の例であることが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究が行った「蓋然説」と「宣教」の相関関係についての分析を通じて、わが国のいわゆる“キリシタン史”研究を、近世初期のグローバルな思想史研究に接合する方法を提示することができた。また、神律との強い葛藤を根源とする「告解」という行為の思想史的理解は、殊に我が国においては、西ヨーロッパ言語文化とその精神性の深い理解、ひいてはその根底にあるキリスト教思想のリテラシーの向上という意味において、我が国の思想史研究の発展にとって意義があったと考える。さらに、これまで分析されたことのない在外資料を国内外に広く公表した点においても意義が認められる。

研究成果の概要（英文）：Probabilism, which had been established in Catholic theology since the late 16th century, functioned as a powerful theological bases of justification in the Catholic mission in Japan when missionaries were faced with judging the licitness of acts that could not be judged by existing ethical-theological standards. It also functioned as a psychological relief for their internal moral dilemmas.

An analysis of the third copy in the world of “Sanctos no gosageveo” or the Lives of Saints published by the Jesuit Mission press in Japan in 1591 confirmed that the handwriting found in the book was one of the earliest examples of Japanese being studied in Europe with comparative perspective with other Oriental languages in the Levant.

研究分野：近世初期日本キリスト教宣教師

キーワード：蓋然説 日本キリスト教史 宣教師 カトリシズム キリシタン サントスの御作業 スペイン

1. 研究開始当初の背景

16世紀前半以降の、ヨーロッパのカトリック神学における「蓋然説」(Probabilism)の発展と、カトリック教会の世界宣教の進展とがいかなる関係性にあるかについて、日本宣教の事例を通じて分析する研究はごくわずかである。わが国には室町時代末期から江戸時代初期の、所謂「キリシタン史」という豊穡な研究蓄積があり、日本の社会倫理における特殊事例が、カトリック教会法に照らして如何に解釈されたかに関する、いくつかの在欧資料がすでに知られている。しかし、それら日本とヨーロッパの間で交わされた議論と決議の背後にある、近世カトリシズムの思想史的理解は、この分野が日本史研究者に主導されてきたという理由により、未だ不足している状況にある。第四ラテラノ公会議(1215年)において、毎年の告解(現代では“ゆるしの秘跡”)がすべての信徒の義務と定められて以降展開された、“ゆるし”の確実性をめぐる近世カトリック教会内の議論、およびその中で特質すべき思想を展開したイエズス会士の存在についてはよく知られている。しかしそれらの議論において確立した「蓋然説」-概して、確率の高い意見に逆らっても、より確率の低い意見に従うことを容認する考え方-が、宣教地における倫理的問題の決議におよぼした影響を査定する研究は、未だ発展途上にあった。

「蓋然説」と「宣教」の相関関係について分析することは、わが国のいわゆる“キリシタン史”研究を、近世初期のグローバルな思想史に接合することである。また、神律との強い葛藤を根源とする告解という行為の思想史的理解は、殊に我が国においては、西ヨーロッパ言語文化とその精神性の深い理解、ひいてはその根底にあるキリスト教思想のリテラシーの向上という意味において、我が国の思想史研究の発展にとって意義ある研究であると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、16世紀前半以降カトリック神学において発達した Probabilism (蓋然説)と、カトリック教会の世界宣教活動の相関関係を、主にスペインに存在する日本宣教関連資料を通じて考察することにある。それによって、「カトリック普遍主義が世界宣教においてどのように自己正当化の理論を考案・実行していったのか」という、近世初期のグローバルな思想史のテーマに関連する事例を提示する。当該資料は日本の迫害下におけるカトリック司祭の聖職者身分の偽装の是非をはじめとする興味深い内容を含む。周辺史料とともに 破損・散逸の危機に直面しているため、それらの資料の整理・保存をおこなうことも本研究の大きな研究の柱となる。

3. 研究の方法

まず、分析概念である「蓋然説」および分析事例である「近世初期イエズス会宣教史」に関して現在活発に進められている海外の先行研究を網羅する。上記が一定の目途に達したところで、スペインにおける一次資料の厳密な調査と分析を行う。研究申請時点で確認できた調査対象資料はマイクロフィルム、あるいは1950年代に内部者によって作成されたタイプ原稿として残されている。マイクロフィルム資料については、機材故障のため一部現在閲覧不可能になっているが、この点に関しては粘り強く交渉していく。同時にそれら資料の元となる原文書の所在の有無を確認し、資料の信憑性を精査する必要がある。当該資料は80年代末から90年代にフィリピンから移管された資料で構成されているが、実際はこの移管の際に同地に残された資料があるようである。この真相を明らかにするために、フィリピンでの調査も行う必要がある。このために、研究期間全般を通じて、夏期休暇、春期休暇の年2回、一度の渡航につき2週間の調査期間を設定する。以上の通り先行研究の網羅とリサーチ・メソッドの確立、一次資料の調査分析を全期間を通して行い、最終年度には、その検討結果を国際的に発表する。

4. 研究成果

一年目は、開始当初より新型コロナウイルス流行に伴うロックダウンに入り、上述の文書館における資料調査は不可能となったため、当初の計画は大きな制約を受けた。しかしリモートで入手できる限りでの、資料や書誌情報を検討・再検討することに時間を費やした結果、予期せぬ発展につながった。具体的には、これまで管見の限り本邦で紹介されたことがなく、世界に二冊と言われていた日本イエズス会版(通称キリシタン版)『サントスの御作業の内抜書』(1591年刊)の、第三冊目の所在が、フランス国立図書館貴重書保管部で確認できたことである。この資料の、稀書としての書誌学的価値は言うまでもなく、迫害下における信

徒の行動指針に関する内容を含むことから本研究課題とも密接に関連する。また同書のブローベナンスや、旧所蔵者による欄外への書き込みなどは、17世紀後半のフランスにおける東洋（オリエント）研究が、エジプト、コプト、アラブ、中国を越えて、ベトナム語、日本語へとその研究対象を拡大していたことを証明するものであった。

二年目は、引き続き継続する渡航規制のため、本研究開始時に想定していた在外資料調査が再び不可能であった。しかし、上記『サントスの御作業の内抜書』に関して、所蔵館員の助力を得てオンライン上で情報を授受することにより、その情報を国内に向けて発表することができた。日本イエズス会版の近世グローバル・ヒストリーにおける重要性については海外においても注目が集まっており、本課題開始後にもオランダにおいて一点の所在が確認されている。研究代表者は主にヨーロッパにおけるそれら当該資料を扱う研究者と綿密なネットワークを築き、次年（最終）度9月に国際シンポジウムをライプツィヒ大学と共催する計画を立案した。したがって、二年目はそのための準備作業にも多くの時間を費やした。また、「蓋然説と宣教」という本研究課題のテーマに密接にかかわる、16世紀カトリック教会における最大の倫理神学者として名高いマルティン・デ・アスピルクエタ(Martin de Azpilcueta)を原著者とし、彼の死後イエズス会士ピエトロ・アラゴナ(Pietro Alagona)によって編纂された『ナバルスの告解提要 *Compendium Manualis Navarri*』の日本イエズス会版（1597年刊）の文献学的分析にも専心した。アスピルクエタとその著作については、ドイツのMax Planck研究所 Institute for Legal History and Legal Theoryが国際研究プロジェクトを組織しており、同研究所との協力関係のもとで速やかに分析を進めることができた。上述の刊本は、マニラの聖トマス大学図書館で1980年代に発見された世界で唯一の刊本であり、すでに全文がインターネットで閲覧可能な状態になっているにもかかわらず、発見以来およそ40年にわたって分析がほとんどなされてこなかった。研究代表者は、ヨーロッパで刊行された同名の著作の諸版を比較分析した結果、1592年アントワープ版が、日本イエズス会版の典拠である可能性が高いことを論証した。その研究結果は、本課題成果報告書作成時点の現在、出版社において最終稿の作成段階にある。

最終年度となる三年目は、渡航規制が緩やかになったことにより、本研究開始時に想定していた在外資料の調査をスペイン・バリャドリードのアウグスチノ会神学研究図書館（la Biblioteca del Estudio Teológico Agustiniiano de Valladolid）において行った。それとともに、上述の日本イエズス会版『サントスの御作業』の現地調査を、フランス国立図書館において行った。使用されている紙や印圧、旧所蔵者である東洋学者ルイス・ピック（Louis Picques）の旧蔵書群等について、リモート調査を補完する有益な情報を得た。

さらに、昨年度立案した"Religion, Translation and Transnational Relations: Japan and (Counter-) Reformation Europe"と題するシンポジウムを、ライプツィヒ大学人文社会科学高等研究センターにおいて開催した。同大学のKatja Triplett氏、オックスフォード大学のPia Jolliffe氏、そして研究代表者がオーガナイズを担当した。中近世後期～近世初期日本キリスト教史に、国語史、科学史、宗教史、美術史をはじめ様々なディシプリンから関連する12名の研究者を招き、オンライン参加者を世界中から交えた活発な議論の場を設けた。また、シンポジウム招聘者とともに、ヴォルフエンビュッテル（ドイツ）のヘルツォーク・アウグスト図書館（Herzog August Bibliothek）で近年存在が確認されたキリシタン関係写本・刊本の調査を企画・実行した。

以上の研究活動を通じて現時点で明らかになった主要な点は以下のとおりである。

まず、従来テーマである「蓋然説」と「宣教」についてである。16世紀後半以降カトリック神学において確立していく「蓋然説」は、日本を含む世界各地の宣教活動において、宣教師が、過去の事例では判断できないような行為の善悪の判断に迫られた際の、有力な神学的道標として機能しており、かつ、彼らの内的道徳的ジレンマに対する心理的な安寧としても機能しているという構造が明らかになった。一方渡航規制により、資料の全容について未だ明らかにできなかった部分があることは否めないため、今後の課題としたい。

次に、期せずして存在が確認された『サントスの御作業』についてである。この第三の刊本の最大の特徴ともいえる、旧所蔵者Picquesによる多くの書き込みは、日本語が、レバント地方を含む東洋諸語との比較対象を伴ってヨーロッパで研究された、非常に初期の、そして稀有な例であることが確認された。このことは、17-18世紀ヨーロッパにおける東アジア諸言語研究、という新しいテーマへと研究対象を拡大する可能性を拓くこととなり、総体的にみて、上述の不足を十分に補う研究成果を提示することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 折井善果	4. 巻 157
2. 論文標題 フランス国会図書館蔵『サントスの御作業』（1591年）について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 キリシタン文化研究会会報	6. 最初と最後の頁 15 - 22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Yoshimi Orii
2. 発表標題 Pietro Alagona's "Compendium Manualis Navarri" published by the Jesuit Mission Press in Early Modern Japan (1597)
3. 学会等名 Max Planck Institute for Legal History and Legal Theory, "Legal Books and Beyond in the Iberian Worlds: Normative Knowledge Production in the Age of Printing Press" Virtual form. January 20, 2022. (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yoshimi Orii
2. 発表標題 The Theological Sources of the Theory of "Dissimulation" During the Period of Persecution of Christianity in Japan
3. 学会等名 International Symposium, "Religion, Translation and Transnational Relations: Japan and (Counter-) Reformation Europe," Leipzig University, 1 September 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Yoshimi Orii	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Amsterdam University Press	5. 総ページ数 338
3. 書名 "The Catholic Reformation and Japanese Hidden Christians: Books as Historical Ties". Madar, H. (ed.), Prints as Agents of Global Exchange, 1500-1800. 159-180.	

1. 著者名 Yoshimi Orie y Maria Jesus Zamora Calvo (eds.)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Madrid: ABADA Editores	5. 総ページ数 302
3. 書名 Cruces y Ancoras: La Influencia de Japon y Espana en un Siglo de Oro Global	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 International Symposium, "Religion, Translation and Transnational Relations: Japan and (Counter-) Reformation Europe," Leipzig University, 1-3 September 2022	開催年 2022年 ~ 2022年
--	----------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------